

くこと」のできない自分にジレンマを覚えていたからです。

最近、「聴くこと」の大切さを説く本が増えているような気がします。元NHKアナウンサーが、著名人や時の人のインタビューをもとに著した「こころの声を聴く力」（山根基世著・潮出版社発行）も、その一冊かと存じます。

この本にたまたま出会い、聴き手は話さないこと、話し手に誠実な関心を抱くこと、知らない自分に気づく謙虚さ、聴かれる人の身になって聴くこと、さらには、共感する心で聴くことなど、学ぶところ大でした。

そして、世の中には「聴き上手」な方がいるものだ、と感心しつつ、「聴くこと」は、相手と時と場に応じて異なる行為でなければならぬことに、今更のように気づきました。

ページをめくりながら、家庭や学校において、親御さんや先生方が子どもと向き合い、子どもの悩みや不安、切なさ、苛立ちなどを「聴くこと」と、テレビ番組のインタビューにおける「聴くこと」とは、(むしろ)共通点も数多くあります(目的も手だても深刻さも明らかに違う、ということに思いが至ったのです。

その違いとは、次の点です。

○家庭教育や学校教育の場における教育相談的な「聴くこと」

主に子どもの成長上の「影」の部分で「聴くこと」であり、話し手である児童・生徒が、一見、聴き手である親や教師に相談(質問)しているようで、実は自分自身に向けて発し、自分でその答えを見つけようとする「自問自答」の営みが絶対に不可欠である。

また、ある方が、「聴」という漢字は、言葉や表情などの奥底にある十四の心に耳を傾けるといふ意味ではないか」と語ったように、学校や家庭、教育相談の場で「聴くこと」は、あくまでも話し手が中心で、児童・生徒の「十四の心」に全身全霊で耳を傾ける行為であり、話し手主体の行為である。

○インタビューにおける「聴くこと」

インタビューにおいて、専門分野で卓越した業績や快挙を残した人物の「光の部分(の秘話や裏話)」を「聴くこと」には、話し手の「自問自答」は必ずしも求められていない、と思う。

また、「聴」という漢字は、十四歳の頃の繊細で柔らかな感受性で相手の言葉を、耳を澄まして聴いていると、自分の内なる心に気づきはじめるという意味。」との著者の新解釈(?)からもうかがえるように、インタビューは、他の番組では

聴けない、取って置きの話や時の人の率直な気持ちを引き出すことによって、聴き手を介した視聴者が何らかの影響を受けるという聴き方である。したがって、「聴くこと」の主体は聴き手で、「聴くこと」の主眼はテレビの前の視聴者にある。すなわち、「聴くこと」によって、聴き手自身が「自分の内なる心に気づく」行為である。

インタビューの「聴くこと」と子どもの話を「聴くこと」は、元々異質なもので、殊更に比較することもあるまい、とお叱りをいただきそうです。「迷惑」の二文字も頭の中をよぎります。

しかし、実はこの二つの「聴くこと」を混同しているために、子どもの気持ちをも十分に聴けない事例が少なくありませんので、あえて申し上げた次第です。

親御さん、並びに、先生方には、「聴くこと」の大切さと難しさを承知され、日々、時と場と相手に応じた、ご自分への聴き方を磨いていただきたいと存じます。——多くの子が、心のエネルギーを惜しむことなく費やして、親身に、真剣に聴いてくれる大人の存在を求めています。

原点は、相談される方(来談者)のお話に真剣に耳を傾け、共感的に「聴くこと」と考えています。

人は、話すことによって、自問し、複雑に絡み合った深刻な悩みの問題点を自分なりに整理して、絶望的な八方ふさがりの窮地においても、自分自身の心の中にある悩みや問題の答えを見出す存在であるからです。

さらに、教育相談員の助言の如きは、ほとんどの場合、相談される方はすでに実践されているからです。

したがって、教育指導員ならぬ、教育相談員である身の役割は、お話を聴きし、勝手な判断で勝手な答えを小賢しく示すことを厳に慎み、正答をなかなか見出せない質問や疑問について、ご一緒に悩み、考えることと心得ています。

子どもの成長上の問題や悩みには、必ず効能のある処方箋はありません。しかし、不登校やいじめ、非行、集団不適應、適切な就学などについて、一緒に悩み、考えることによって、必ずや子どもの健全やかな成長のための「何か」が見出せるものと信じています。

《参考図書》

◎フロカウンセラーの聞く技術
東山紘久著 創元社発行